

Title	落語の「オチ」についての一考察：認知的観点から
Author(s)	貞光, 宮城
Citation	Osaka Literary Review. 38 P.129-P.144
Issue Date	1999-12-24
Text Version	publisher
URL	<a href="http://doi.org/10.18910/25411">http://doi.org/10.18910/25411</a>
DOI	10.18910/25411
Rights	

**Osaka University Knowledge Archive : OUKA**

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

# 落語の「オチ」についての一考察

— 認知的観点から —\*

貞 光 宮 城

## 1 序

本稿では落語の「オチ」をとりあげ、認知言語学の立場から、とりわけ談話の理解におけるメトニミー的認知の観点からこれを考察する。まず2節で枝雀(1980)によって「謎解き」と分類されるオチを紹介する。次に3節でメンタル・スペース理論に基づいてそのタイプのオチを分析する。さらに4節でその妙味について考える。

従来の単なる意外性や逸脱に留まらない、オチのからくりに迫ることが本稿の目的である。

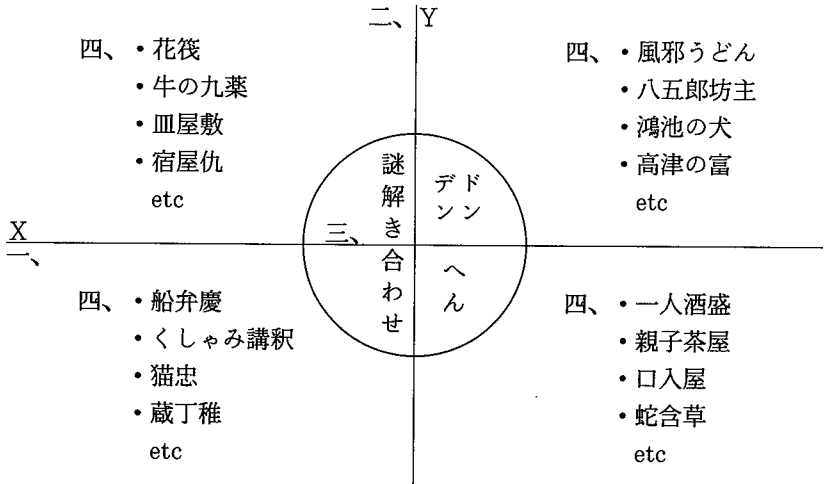
## 2 枝雀のオチの分類

一言でオチといっても様々な種類があり、研究者によってもその分類が異なる。<sup>1</sup>ここでは比較的理論的に分析してある枝雀(1980)の分類に着目し、その中の「謎解き」に相当するオチを取り扱うこととする。

### 2.1 枝雀(1980)の分類

上方落語家の二代目桂枝雀(1939-1999)は、笑いの本質を緊張と緩和の対立ととらえ、オチについて独自の分類を行っている。枝雀(1980)の分類の基本には次の二つの要素がある。その一つが、オチ(サゲ)を聞いて面白いと感じる理由を「緊張の緩和」にあるとすること、もう一つが、落語は「嘘話」がベースであると考えることである。<sup>2</sup>これら2つの要素の組み合わせにより落語のオチは、「へん」、「合わせ」、「ドンデン」、「謎解き」の四つ

に分類される。この四種類のオチの関係を示したのが次の<Fig. 1>である。



<Fig. 1 サゲの分類図> (枝雀 1980: 15)

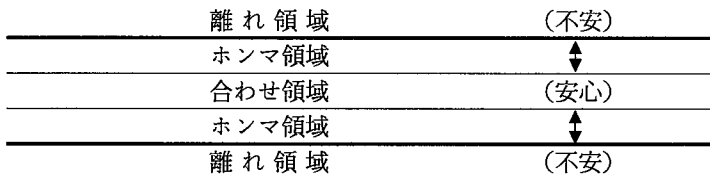
まず X 軸の上下で対立するのは緊張と緩和の落差の大小で、X 軸より上の部分は緊張があって後から緩和がきて笑いを引き起こすという型がハッキリしており、ドンが緊張でデンが緩和、謎が緊張で解きが緩和にあたる。それに対して下の部分は緊張と緩和がない交ぜにやってくるという感じが強くなる (一)。

次に Y 軸の左右で対立するのは合理性の高低である。Y 軸を境にして右側は「サゲを聴いての感じ方が『そんな阿呆なァ』 > 『なるほど』」という公式になり、左側は『そんな阿呆なァ』 < 『なるほど』」 (枝雀 1980: 15) となる (二)。

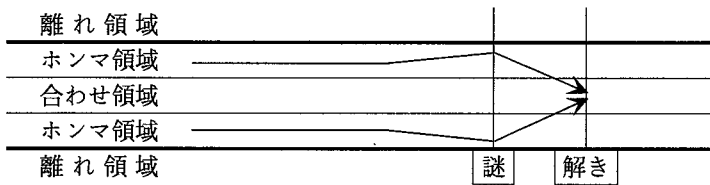
また「謎解き」と「合わせ」は連続性が高く、ときに X 軸の上下に関して区別がなくなると分析している (三)。そしてこれら四つの分類に当てはまる例を図のように挙げている (四)。

さらに、噺の基調となる叙述がどのような性質のものかを<Fig. 2>を用いて表し、これに基づいて上述の四つのパターンを説明している。ここでは

本稿で考察する「謎解き」のタイプについてのみその説明を〈Fig. 3〉に示す。<sup>3</sup>



〈Fig. 2 ウソの領域とホンマの領域〉 (枝雀 1993: 105)



〈Fig. 3 謎解き〉 (枝雀 1993: 106)

まず〈Fig. 2〉についてであるが、当初話自体は本当らしく「ホンマ領域」で語られていく。その内外に「ウソ領域」があり、外側の「離れ領域」とは、ホンマの世界から離れ常識の枠を出る、とりとめがない極く不安定な世界を指す。一方、内側にある「合わせ領域」は、人為的に合わせるというウソの領域であるが、「離れ領域」と違って「合う」ということは安定していると考えられる。

ここで「謎解き」のタイプは〈Fig. 3〉で示される様に、オチの前で謎を生み疑問をもたせ、一旦は「離れ領域」の方に向かうものの（緊張）、最後には「合わせ領域」でその謎を解いて納得させ、安定を得る（緩和）という特徴を持つと分析されている。

枝雀によれば、「東京落語、上方落語のサゲを全部調べてみましたが、全てこの四つにあてはまります」（枝雀 1980: 13）とされる。

## 2. 2 枝雀 (1982) の検証

ここでは「謎解き」タイプのオチの枝雀の分析を古典落語『寝床』で検証を試みる。以下がそのオチの部分である。<sup>4</sup>

- (1) a. 「(前略) だれだ、そこで泣いているのは? なんだ、定吉じゃないか。なにを泣いてんだ? えっ? 悲しゅうございます? そうか、よし、こっちへおいで、泣くんじゃない、泣くんじゃないよ。(中略) 感心なもんだ。おまえだけだな、あたしの芸がわかったのは。あたしゃうれしい。おまえだけでもよく聞いていてくれて。で、どこが悲しかった? おまえは子供なんだからきっと子供のでてくるところだな。そうだ、『馬方三吉子別れ』か?」
- b. 「そんなとこじゃありません。そんなとこじゃありません」
- c. 「じゃあ、『宗五郎の子別れ』か? えっ? ちがう? ああ『先代萩』だな?」
- d. 「そんなとこじゃありません。そんなとこじゃ・・・」
- e. 「じゃあ、どこだい? いってごらん、どこが悲しかった?」
- f. 「あすこでございます、あすこでございます」
- g. 「あすこ? あすこはあたしが義太夫を語った床じゃないか」
- h. 「あすこがあたくしの寝床でございます」

(興津 1972: 147)

ここで <Fig. 3>の分析を考えると、ホンマ領域を順調に進んできた談話が定吉の (1f) の発話 (及び身振り) で常識の枠を出る「離れ領域」に向い、ここで「謎」がかかることになる。しかし、そのまま「離れ領域」へ「へん」のタイプのように不安定領域に発散してしまうのではなく、(1g) の発話でその謎を解き、納得させ、再び「合わせ領域」において収束することにより安定を得ることになる。

## 2. 3 枝雀 (1982) の問題点

ここで一つだけ納得できかねるところがある。それは、〈Fig. 3〉による「謎解き」の分析において、談話の進行を表す矢印がはじめから二本平行して進んでいるところである。これは語り手側の意図にはじめから二つの読みを同時進行させていることを表すものと思われる。しかし、聴き手（特に始めてその話を聞く聴き手）は普通語り手の意図するもう一つの読みを前もって知ってはならず、また、語り手と同時に二通りの読みを進めてはいないはずである。聴き手は、談話の流れに応じたごく普通の典型的な読みの方のみをたどっているが、ある場面に到達したとき、それまでの談話の流れに沿ってはいつじつまが合わなくなる部分にぶつかる。つまり、緊張が高まる。そこにサゲが続き、それにより典型的な談話の流れ（主流）に平行した潜在的な流れ（伏流）があることに気づかされ、納得するに至り、緊張の緩和がもたらされるのである。

枝雀 (1982) の分析が従来のものに比べ聴き手の立場によっている（野村 1994: 161）とはいえ、やはり枝雀自身が噺家であるせい、いま一步語り手側に分析が留まっているように思われる。

## 3 オチの分析

本節では「謎解き」のオチを認知言語学的観点から再検討する。まず 3.1 節でメンタル・スペース理論を概観する。次に 3.2 節でこれを用いてそのオチの部分のメンタル・スペース構成を見る。そしてメトニミー的認知能力の観点から、「謎解き」タイプのオチをより細かく分析する。

### 3. 1 メンタル・スペース理論

メンタル・スペースとは「要素と、それらの要素の間に成り立つ関係から成る増加可能集合 (incrementable set)」(坂原他 1996: 274) と定義される。またこれは、言語理解の際の文法構造と世界の間におかれる認知インターフェイスであると仮定されている。メンタル・スペース理論は、この言語使

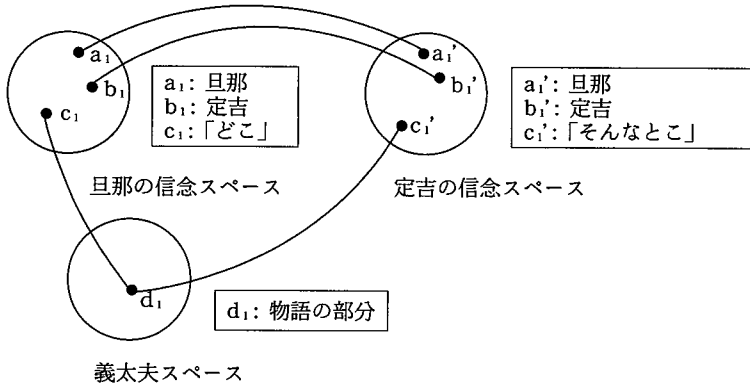
用のダイナミックな側面を捉えようとする概念によって、自然言語の意味的・論理的操作を適切に記述・説明できる意味論の構築を目指す理論である。

ここでこの理論には二つの重要な仮定がある。その一つが、言語と世界との直接的対応は仮定されていないことである。換言すれば、言語表現はメンタル・スペースの要素を指したり、同定するが、外界世界の要素を指示したりはしないと仮定されている。もう一つが、言語表現の意味は不十分にしか決定されていないということである。つまり、ある一つの表現に対して複数のメンタル・スペース構成が可能となる。ただし、談話のコンテキストや対話者の関心がこの表現の解釈の幅を制限しているとされている。

この理論はメンタル・スペースという操作概念の他に、同定 (ID) 原則やスペース最適化 (Optimization) などの一般的な原則から主に構成されている。<sup>5</sup>

### 3. 2 オチのメンタル・スペース構成

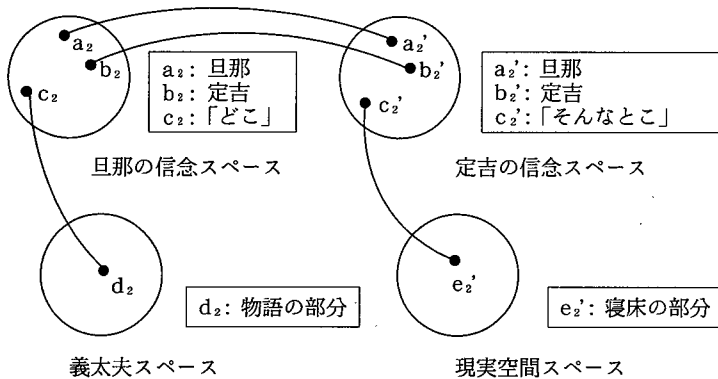
2.2節と同じく『寝床』のオチの部分进行分析し、談話の動的な展開を見ることにする。まず (1a-e) と謎がかけられる前まで、つまり典型的 (デフォルト的) な流れに則した談話が続いている部分までのメンタル・スペースの構成は次の <Fig. 4> の様になると考えられる。<sup>6</sup>



<Fig. 4> (Cf. Fauconnier 1997: 114-8)

ここで、図中の四角はスペースの内部構造を示しているが、旦那の信念スペースでは「旦那は義太夫を語るのがうまい」、「定吉は物語に感動して泣いている」の構造を持ち、それがスペース最適化原則により定吉の信念スペースにもデフォルト的に継承されている。つまり、談話中の指示代名詞はともに義太夫中の物語の場所を指すものとして解釈される。<sup>7</sup>

続いて (1e, f) で謎がかけられ、(1g) でサゲる部分のメンタル・スペース構成を<Fig. 5>に示す。ここでは定吉の信念スペース内の指示代名詞が「定吉の寝床」という現実空間での場所を指していることを示すことにより、<Fig. 4>での指示関係をキャンセルする。そしてスペース最適化原則により、旦那（及び観客）の信念スペースも修正される。つまり、「定吉は寝床を占領されて泣いている」という明示的な構造が、「定吉は物語に感動して泣いている」という非明示的な構造と矛盾するため、これを修正するのである。



<Fig. 5>

こうして (1e, f) で疑問を抱かされ、旦那の信念を通して聴き手の緊張が高まり、オチの (1g) で それまでの談話の中には聴き手が期待するよう仕向けられた読みの他にもう一つ別の読みが潜んでいたことに気付かされるのである。<sup>8</sup>



ここで注目すべきは、この伏流の読みの発見が最後のオチのただ一句からすべてが理解されるということである。従って、Gibbs (1994) が指摘する、ある ICM の一部分を言及することによってその ICM 全体を喚起するメトニミー的な認知能力 (Gibbs 1994: 328-9) がオチの成立にも深く関与していると考えられる。<sup>9</sup>

#### 4 オチの妙味

本節では「謎解き」と分類されるオチのおもしろみがどこにあるのかを、前節で考察したメトニミー的認知能力の観点から考える。その際、次の五つについて、オチとの類似点および相違点を検討することでオチの認知的な特性を浮き彫りにすることを試みる。その五つとは、反転図形、アイロニー、なぞなぞと推理小説、直喩と隠喩、俳句である。以下、この順に議論する。

##### 4. 1 反転図形

反転図形 (ルビンの盃、ネッカーの立方体、ラビットーダックの多義図形など) は、ある別の見方をするとそれまでの図と地が瞬時に逆転する。この現象とこれまで分析してきた「謎解き」のオチの性質には次の様な類似点及び相違点が見受けられる。

一般に、「私たちの視野の中に二種類の異質な領域が同時に存在する場合、いずれか一方が迫力を帯びて浮かび上がり、他方はその周囲の空虚な空間であるかように感じられる」(河上 1996b: 6) とされる。しかし、この背景を成す領域は必ずしも空虚な空間だけに留まらない。反転図形においても、例えばルビンの盃では、これを全く初めて見る人にとっては、確かに一つの盃かあるいは二人の横顔かのどちらか一方にしか見えないであろう。その際、背景を成す領域の方はまさしく空虚な空間だと考えられる。しかし、一端これが反転図形であることを知った後は、決してそうではないはずである。一方を主に図として見ているときでさえ、今、地として背景化しているもう一

方もたちどころに図として浮かび上がってくる可能性を秘めていることを認識しているはずである。視覚上は見えていないものが、認識の上には存在している。一枚の絵の中に二つの図を見る、この二重構造の認識が反転図形のおもしろみであると考えられる。この二重構造の立体的認識こそがここで分析してきたオチの構造と類似するところである。

一方相違点は、謎解きを表現する部分があるか否かにある。反転図形の方は絵画であるから視覚的情報により十分時間をかけてそのおもしろみを吟味されるに耐えられるよう直接の引き金となるようなものはない。それに対してオチの方は、音声情報による線的な伝達のため、引き金となるサゲの表現を最後に情報の提供を止め、あとの解釈はその引き金をもとにした聴き手のメトニミー的理解能力にゆだねている。そのため、情報の正確な伝達性には劣るが、はっきりとした終わりを提示する分、全体がまとまりを持ち、かえって「修辭的残像」(外山 1961) に広がりを持つことになる。

最後のオチの部分が立体的読みの始まりとなっているのである。

#### 4. 2 アイロニー

主流と伏流という二重の読みがオチには存在するということから、アイロニーとの比較が価値を持ってくると考えられる。河上(1984)で指摘される、先行認識と現実認識のズレの構造がここでのオチの構造と類似する点である。しかもその立体的な認識の理解は、話し手によって全て言語化され表現されるのではなく、一つの発話(音調や態度も含めた)をもとにした聴き手によるメトニミー的解釈に依存している。そのため、必ずしもその複合認識の伝達に成功しない場合も起こりうるが、明示的な言語表現による明確な制限を持たない分、その効果の広がりも(経験、知識などにより異なるが)制限がなくなる。

一方異なる点は、その複合的概念の性質にある。アイロニーは常に反対関係的であるが、オチの方はその必要はない。潜在的に曖昧となりうる表現を、

聴き手に、はじめはその談話の流れに沿った典型的な読みをたどらせておきながら、最後にはサゲの部分から見るとそれまでの漠とした概念の広がりの中にもう一つ別の新たな読みを発見することができるよう巧みに構成されている。

#### 4. 3 なぞなぞと推理小説

本稿で取り上げている「謎解き」のオチは次の謎かけ（三段謎）、なぞなぞ、禅問答と連続的なつながりを持つと考えられる。

(2) 謎 かけ：うどの大木とかけて郵便屋と解く、そのころは、はしら  
にゃならぬ。 (芝原 1992: 81)

(3) なぞなぞ：「坐ると高く、立つと低くなるもの、ナーニ —— 天井。」  
(池上 1982: 149)

(4) 禅 問 答：「作麼生！」

「説破」

「一羽でも鶏、二尾でも秋刀魚と申すが、さてこの義は如何に！」

「一枚でも煎餅、二個でも饅頭というが如し」

これらに共通するおもしろさは、言うまでもなく、謎が解けるというところにある。(2) は同音異義語の二つの意味を同時に立体的に認識することになっており、(3) はオクシモロンに通じ、(4) は地口を用いて（通俗）語源説をとくことになっている。それらが、最後の一句をもとにして、そこから全てが一つにつながってゆく読みが理解されている。<sup>10</sup>

一方、同じ謎を解くものであっても推理小説にはこの効果は少ないように思われる。推理小説の場合はその謎自体が立体的であり、その複雑にからみあった謎を綿密に一つひとつ解くことにそのおもしろみを置いている。この点では禅問答の例が橋渡しをすると考えられる。

よって、オチのおもしろみは謎が解けるという快感だけではなく、それをメトニミー的認知の方法を用いることにより歯切れよく話に幕を引き、それでいて余韻を残すところにあるといえる。"

#### 4. 4 直喩と隱喩

オチは比喩ではない。しかし、上述の謎かけなどとの連続的なつながりを考えると、その発見的な読みという点において直喩、隱喩との類似性が見受けられる。そこで、ここでは佐藤（1978）をもとにオチとこの両者との関係を考察する。

まず直喩についてであるが、佐藤（1978）のいう、類似性に基づいて直喩が成立するのではなく逆に直喩によって類似性が成立する「発見的認識の造形」という捉え方を考慮すると、オチと直喩の間に次の様な比較分析が可能となる。つまり、聴き手（読者）がそれまで気づかなかった読みを話し手（著者）のある表現から発見できるという点において両者には共通した特徴がある。しかし、オチがもともとそこに潜んでいる（潜ませてある）読みを単に最後に気付かせるのに対して、直喩は佐藤（1978）のいうように全く新しい類似性を創造的に発見させるという側面を持つという点で両者は異なっている。その点ではむしろ、次に取り上げる隱喩の方にオチは類似していると考えられる。

隱喩について佐藤（1978）は、隠れている類似性、埋もれている類似性を発掘することが隱喩の生命力であると述べている。この聴き手（読者）に課せられた発掘的態度こそ、オチの一句から聴き手のメトニミー的認知による主体的な解釈の態度と軌を一にするものである。隱喩の生命力とオチの生命力は本質的な部分でつながりを持つと考えられる。

さらに隱喩には、推理小説の込み入った謎を一つひとつ解くように、ある隱喩のどこがどう隱喩たるかを一つひとつ説明してもその隱喩本来のだいたい味はとうに失われてしまうという性質がある。これはオチについても全く同

じことが言える。<sup>12</sup> つまり、ことばのあやが一般に「名状しがたいものを名状せざるをえない、という欲求にこたえるための、やむをえない手段である」（佐藤 1978: 53）のと同様に、オチも、オチを用いなければ表現できないようなもの—その空間の雰囲気や時間の流れをも含めたもの—を、語り手が全てを語り尽くしてしまうのではなく、聴き手のメトニミー的理解能力に大いに依存する形で伝達する以外方法のないものといえる。

#### 4. 5 俳句

線的に表現する方法をとらず、点的に表現することによる俳句の洗練さはメトニミー的認知能力があってこそ成立すると言える。俳句のこの点描的表現技法について、宮崎（1993）に「部分、部分の総和が単なる加算値よりも大きくなり、『意味の交響』を引き起こす」（宮崎 1993: 137）との指摘がなされている。

こうした俳句に見られるような点的修辞による多元的交響が、物語を一つのまとまりとしたオチの妙味にもあてはまる。つまり、潜在的に曖昧さを持つ表現が、本来全くの点ではないが、点的に配置され、聴き手は一応典型的な談話理解の流れをたどる。しかし、これが落語という枠内にあると、サゲの部分に何かしらの仕掛けがあるという前提から、先に述べたような複合的認識に至る。ここにも「意味の交響」に似た効果が引き起こされていると考えられる。

このように考えると、両者ともその表現の理解において時間上の線的な制約を超越していることになる。<sup>13</sup> 提示された順の通りにその表現を解釈しているだけでは到底たどりつけない立体的な概念構造を認識するに至っている。オチを含む談話も、部分の総和が全体になりえないというゲシュタルト的な捉え方を要求するのである。

## 5 結語

本稿は枝雀(1980)で「謎解き」と分類されるオチについて考察した。まずメンタル・スペース理論により、談話の動的な展開を観察し、オチのもつ複合的認識の構造を説明した。次に、様々なレトリックとの比較分析を行い、オチの複合的認識の理解には「一を聞いて十を知る」メトニミー的認知の仕組みがなくてはならない必須条件であるということが示された。これは「人間の言語は、有限の『形式』で無限の『意味』内容を表現しうる知的メカニズムである」(河上 1996a: 32)という言語本来の特性と大いに関係することがらである。つまり、言語で表現されたものは全て一義的にその意味が決定されるというわけではなく、世界の全てを言語で記述しきれないからこそそれを補う仕組みが必要になる。その重要なからくりの一つがメトニミー的認知の仕組みであるといえる。オチの妙味もこの言語の不完全さなればこそ味わえるものなのである。

ここで取り扱ったものは「謎解き」と分類されるオチのみである。他の「ドンデン」、「へん」、「合わせ」については何ら言及していない。これらにも何らかの知的メカニズムが隠されていることは疑う余地もない。これらのさらなる研究は今後の課題としたい。

## 注

- \* 「米朝はうまいのかね。」人間国宝の落語家をつかまえての、故藤井治彦先生のお言葉である。先生とお話しさせて頂いた機会は数えるほどしかないが、そのほとんどが(筆者に合わせてくださって)落語の話題であった。追悼号にはふさわしくない論題かもしれないが、筆者にとっては先生の在りし日を偲ぶ追悼文である。また本稿作成にあたり、河上哲作先生には最終段階までご指導頂いた。記して感謝の意を表したい。
- 1 野村(1994: 148-9)には諸家の分類による次の13種類が挙げてあり、各々そのタイプについて解説がなされている。  
ジグチオチ、マヌケオチ、ブツケオチ、トタンオチ、ヒョウシオチ、ハシゴオチ、サカサオチ、マワリオチ、カンガエオチ、シコミオチ、ミタテオチ、シ

グサオチ、ハナレオチ。

- 2 このことは山口 (1998) がジョークは微視的レベルにおいて会話の格率に違反する不誠実な談話であるとする分析と一致する。ただし、山口 (1998) は巨視的レベルにおいては格率を遵守する責任が課されているとしている。
- 3 このタイプは Yamaguchi (1988) のいう garden-path joke (袋小路ジョーク)、渡辺 (1995) のいうディセプティブジョークにはば対応すると考えられる。
- 4 オチに至るまでの『寝床』の梗概を以下に示す。  
 義太夫に凝った家主が番頭に長屋をまわらせて、義太夫の会の客集めをするのだが、毎度のことにこりている長屋の連中は、いろいろと理由をこしらえてこの誘いを断る。店の者もそれぞれ仮病をつかって、旦那の義太夫を聴くことができないというので、怒り心頭に発した家主は、長屋の者には店を明け渡してもらい、店の者にはひまを出すという。あわてた番頭が、もう一度長屋をまわって人を集めたので旦那も機嫌を直し、ひどい義太夫をみっちり語る。そのうちに、静かになったので旦那が御簾をあけると全員が寝ている。カンカンになった旦那の目に、ただひとり小僧の定吉の泣きじゃくる姿が入ってきた。  
 (矢野 1988: 219)
- 5 紙面上の都合上、ID 原則及びスペース最適化についての説明は省略する。詳しくは、Fauconnier (1994: 3, 91) をそれぞれ参照されたい。
- 6 ここで典型的な談話の流れとは、Lakoff (1987) のいう Idealized Cognitive Model (ICM)、あるいは Gibbs (1994) のいう scenario に沿った読みを指す。
- 7 落語が観客に聴いてもらう話芸であることを考えると、<Fig. 4>全体は「落語スペース」と呼べる様なスペース内にあると考えられる。そして観客の信念スペースにも<Fig. 4>の内部構造は継承される。つまり、観客も旦那と同じ誤解をするよう仕向けられるのであるが、この点において Yamaguchi (1988) の Character-Did-It 仮説が成立している。
- 8 これと同じタイプの punch line を持つと考えられる次のような英語のジョークも同様に分析できる。  
 “I can’t seem to find any cause for your sickness,” said the doctor.  
 “Frankly, I think it’s due to drinking.”  
 “Well, if that’s the trouble,” said the patient, “I’ll come back when you’re sober.”  
 (渡辺 1995: 160)
- 9 拙論貞光 (1996) では、間接的要請文の理解の際にメトニミー的な談話理解能力を必要とするという同様の分析を行っている。
- 10 ただし、禅問答の場合は少しずれると考えられる。
- 11 これは、「笑いがスピーチイベントの終了を合図する役割も果たしている」(井出 1997: 155) という効果と関係する。
- 12 詳しくは、米朝 (1984: 241) を参照されたい。

- 13 「言葉が必ずしも常に時間の一方的な流れに沿って了解されているのではない」ことを外山（1961）は修辭的残像と塑像という概念をもとに説明している。

### 主要参考文献

- Fauconnier, Gilles 1985. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*, MIT Press, Mass. Rev. ed., Cambridge University Press, 1994. [坂原茂、水光雅行、田窪行則、三藤博訳 1996. 『メンタル・スペース—自然言語理解の認知インターフェイス—』白水社 東京.]
- Fauconnier, Gilles 1997. *Mappings in Thought and Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Gibbs, Raymond W., Jr. 1994. *The Poetics of Mind*, Cambridge University Press, New York.
- Lakoff, George 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*, The University of Chicago Press, Chicago and London.
- Yamaguchi, Haruhiko 1988. "How to Pull Strings with Words: Deceptive Violations in the Garden-Path Joke," *Journal of Pragmatics* 12, 323-37.
- 池上嘉彦 1982. 『ことばの詩学』岩波書店 東京.
- 井出里咲子 1997. 「笑い作りのメカニズムと意味：アメリカ社会の他人同士のディスコースから」日本英語学会『Conference Handbook 15』, 151-6.
- 桂枝雀 1980. 「緊張の緩和とサゲの四分類」『上方芸能』68号, 10-5.
- 桂枝雀 1993. 『らくご DE 枝雀』ちくま文庫 東京. (1982. 『まるく笑ってらくご DE 枝雀』PHP 研究所 東京.)
- 桂米朝 1975. 「落語のサゲ」桂米朝編 1984. 『日本の名随筆集 22』, 241-50, 作品社 東京.
- 河上誓作 1984. 「文の意味に関する基礎的研究」『大阪大学文学部紀要』第 24 卷.
- 河上誓作 1996a. 「『言語使用の創造的側面』と言語理論」『言語』第 25 卷 第 4 号, 52-9.
- 河上誓作編著 1996b. 『認知言語学の基礎』研究社 東京.
- 興津要編 1972. 『古典落語（上）』講談社文庫 東京.
- 貞光宮城 1996. 「間接的要請文の一考察—Thank you について—」『全国語学教育学会山口支部研究紀要』第 2 号, 37-54.
- 佐藤信夫 1978. 『レトリック感覚』講談社 東京.
- 芝原宏治 1992. 『錯誤のレトリック』海鳴社 東京.
- 外山滋比古 1961. 『修辭的残像』垂水書房 東京.



- 野村雅昭 1994. 『落語の言語学』平凡社 東京.
- 宮崎充保 1993. 「ことばと文化の壁(2) - 異文化と英語 -」『山口大学教養部紀要 人文科学篇』第27巻, 136-49.
- 矢野誠一 1988. 『落語手帖』駸々堂 東京.
- 山口治彦 1998. 『語りのレトリック』海鳴社 東京.
- 渡辺政徳 1995. 「ジョークと関連性理論 - 『ディセプティブ』ジョークのメカニズムの語用論的分析 -」『上越教育大学大学院学校教育研究科言語系コース(英語)研究論集』第10巻, 151-65.